

Juichi WAKISAKA Race Report

2015 AUTOBACS SUPER GT Round 2 - FUJI GT 500KM RACE -

◆◆ チーム一丸となって奮闘、7位入賞を果たす ◆◆

No. 19 WedsSport ADVAN RC F		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 関口 雄飛	15位	7位



■大会概要

開催日：2015年5月2日-2015年5月3日

サーキット：富士スピードウェイ（静岡県御殿場市、コース全長：4.563km）

レース距離：110周（501.93km）

入場者数：予選日33,500名、決勝日58,000名、合計91,500名

大型連休の真っ只中、5月2-3日、富士スピードウェイにおいて2015年SUPER GT第2戦「FUJI GT500km RACE」が行われ、No.19 WedsSport ADVAN RC Fを駆る脇阪寿一とパートナーの関口雄飛選手は予選15番手からスタート。他車同士の接触やセーフティカー導入など荒れる状況の中、7位でフィニッシュ。2戦連続の入賞&ポイント獲得を達成した。

なお、富士での一戦を前に、チームは仙台にあるスポーツランドSUGOにおいてタイヤメーカーテストに参加。データ取り、フィーリングの確認など緻密な作業を繰り返し、それをもとに富士でのレースに挑んでいる。

■5月2日(土)

08:50-10:35 公式練習（10:45-11:00 サーキットサファリ）

14:35-14:50 ノックアウト予選（Q1）

15:20-15:32 ノックアウト予選（Q2）

【公式練習】 14番手 / 1'30.296

例年、富士での一戦は連休の最中に行われる賑やかなイベントとして知られる。レースウィークには多くのファンがサーキットへと足を運び、SUPER GTの走行だけに留まらず、トークショーをはじめとした様々なイベントが開催された。脇阪も出来る限りの時間ファンとの交流を楽しんだ。

予選日は、まず午前8時50分から公式練習がスタート。青く澄み渡った空がサーキット一面に広がり、気温21度、路面温度25度というコンディション。チームではSUGOのテストで得たデータをもとに、クルマ、タイヤの状況を改めて確認する作業に入った。一方で、富士はSUPER GTを開催するサーキットの中で唯一のローダウンフォース仕様の空力パーツを装着する戦いでもあるため、クルマのバランスを意識したチェック作業なども継続的に行われた。

セッション中は関口選手が2種類のタイヤを装着して走行。予選で装着するタイヤの選択を行う。そのあとステアリングを引き継いだ脇阪がクルマのフィーリングを確認しながらロングランを担当した。脇阪は、「もう少しタイムが伸ばせたら…という思いを持ちつつも、安定したタイムを刻むことができた」と14番手で終わったセッションを振り返った。



【ノックアウト予選（Q1）】 15番手 / 1'29.616

公式練習終了後も強い日差しが続き、汗ばむほどの陽気となった富士スピードウェイ。GT500のノックアウト予選が予定より6分遅れの午後2時41分にスタートする。気温26度、路面温度38度と想定よりも高い数値となり、チームはQ1でアタックを担当する関口選手のクルマにライバル勢よりも硬めのタイヤを装着した。

セッションタイムは15分。とはいえ、早々からコースインする車両は皆無。満を持して関口選手がピットを離れたのは、残り時間9分を迎える頃。しっかりとタイヤに熱を入れ、アタックを行う。まず1分29秒728のタイムでチームベストをマーク。さらに翌周には1分29秒616まで縮めてアタックを終了。チームとしては理想のアタックを完遂したが、得たポジションは15番手。Q2進出は果たせなかった。

「朝の練習走行で乗ったクルマのフィーリングもさほど悪くなかったし、予選での関口選手のアタックも満足の行くものだったと聞きました。そういう意味では、ライバルに対し、僕らが選んだタイヤがハード寄りのもだったということが推測できます」と脇阪。さらに何の確認もないが、と前置きした上で「天候の推移、選んだタイヤなど色々なことが決勝でどう変化するのか、これはいずれにせよフタを開けてみるまでわかりません。上位陣で軟らかめのタイヤを選んだチームが気温や路面温度の上昇によってどうなるのかなど、そういうことも含めて決勝の展開には多少の望みも持っています」と続けた。

順位こそ悔しさの残る数字ではあったが、現在、進化中である自分たちのクルマとタイヤのポテンシャルを最大限引き出して戦う、という姿勢に当然ながら揺るぎはない様子だった。



■ 5月3日(日)

09:00-09:30 フリー走行

14:15- 決勝（110周）

【フリー走行】 11番手 / 1'30.853

前日同様の快晴に恵まれた富士スピードウェイ。予選日は3万3500人が、そして決勝日には5万8千人もの観客が来場。午前9時から行われた30分間のフリー走行では、クルマのチェックをはじめ、今回2度行うドライバー交代の練習など、決勝に向けての準備を着々と進めることになった。



【決勝】 7位 / 4ポイント獲得（シリーズポイント：5ポイント、シリーズランキング：11位）

500kmという長丁場の決勝レースを前に、気温は25度、路面温度は39度まで上昇。スタンドはびっしりファンで埋め尽くされている。No.19 WedsSport ADVAN RC Fのステアリングを最初に握ったのは、関口選手。警察車両によるパレードラップを経てセーフティカー先導のフォーメーションラップを終えてレースがスタートする。ダンロップコーナー手前で前を走る車両が複数接触する混乱を落ち着いて回避した関口選手は、10番手までポジションアップしてオープニングラップを消化した。

序盤、ハイペースで周回するライバル達に対し、硬めのタイヤを装着するNo.19 WedsSport ADVAN RC Fはややペースを落としての走行が必須となる。このため、少しポジションを落とすことにはなったが、自分たちのペースでキチンと周回を重ねることに集中。このあとも他車同士の接触やセーフティカーのコースイン、と混乱の続くレースとなったが、つねにNo.19 WedsSport ADVAN RC Fは安定したタイムを刻み続けることで、ひと桁の順位で周回を重ねる時間が長くなっていった。

1回目のルーティンワークは39周終了時。燃料補給とタイヤ交換を行い、ピットで待機する脇阪へとスイッチした。依然として混乱の続く中、8番手でコースへと復帰した脇阪は冷静にかつ安定したタイムを刻むことに集中。巧みな駆け引きでライバルたちとの攻防戦を消化していく。ミスなく、与えられた状況の中でつねに最善を尽くす、という強い気持ちが伝わる走り続けた脇阪は37周を走り切り、77周終了時点でピットイン。再度、関口選手へとステアリングを委ねた。

レースは後半に入ると、予想よりも気温と路面温度が下がったことから、チームは軟らかめのタイヤを選択。終盤の追い上げに希望を託すことになる。暫定8番手でコースに復帰した関口選手は、荒れるコンディションの中でも安定したタイムを刻み続け、84周目には7番手へと浮上。このまま粘りの走りを見せて500kmの長い戦いを終えることになった。



開幕戦から2戦連続の入賞、ポイント獲得を実現させたNo.19 WedsSport ADVAN RC F。「厳しいレースではあったが、ドライバーそしてチームスタッフみんなが誰一人としてミスすることなくレースを進めることができた」と戦いを振り返った脇阪。軟らかめのタイヤを選択したライバルチームによる安定した走りが想定外だったと言う一方で、「自分たちがやるべきことをキチンとやれたことは良かった」と現状を受け入れた。「2戦連続でポイントゲットを果たしたから満足ということは決してなく、今回の結果

でライバルに対して負けている部分がより見えてきたので、次のタイ戦に向けて色々準備したい」と早くも戦闘モードに。「あれができた、これができた、と思うことはありますが、次につながるレースができたのも事実。結果が残せなし、なによりも多くの声援をいただき、それをパワーに変えることができました。ありがとうございます」と、感謝を胸にタイ戦での奮闘を誓った。

着実な進化、粘りを見せつつある No.19 WedsSport ADVAN RC F。灼熱の戦いが想定されるタイでの一戦は、より一層の高みを目指し、力強い走りを披露するに違いない。

次戦は、6月20日(土)-21日(日)に今シーズン唯一の海外戦となるチャンインターナショナルサーキット（タイ）で開催される。

【Photo Gallery】



